

「もの言わぬは腹ふくるるわざなりー戦争の足音が聞こえる」

堀江 節子

日々の暮らしのなかでいろいろなことを考えるが、書いたものを発表する機会はほとんどない。ミニコミをやったし、インターネットの時代になって自前で発信することができるようになったが、仲間内の域を出ない。新聞に意見欄があるがなんか違う。自前のメディアがあればと思う。

現在、地球上で紛争や戦争地域が広がり、東アジアでも朝鮮半島や台湾有事を仮想して軍事的緊張が意図的に高められている。抑止力を増すために米軍指揮のもとで敵国へのミサイル攻撃が必要だと日本国民は許容した。しかし、本土では敵基地攻撃の反撃で沖縄や南西諸島の住民が命の危険にさらされることは伝えられない。マスメディアに限界を感じる。

「戦争の足音が聞こえる」昨今、学術会議問題のように政府に不都合な見解をもつ専門家は外され、右派のヘイトで市民の表現の自由も危うくなっている。クリティカルでありたいと思っているが、自己規制することもあり、「もの言わぬは腹ふくるるわざなり」という心境に陥る。意見に異見があつてこそ高次の世論が生まれるが、市民の批判に耳を塞ぐ政治に危さを感じる。

思想の自由を確保するためには言論の場が必要だ。翁久允が戦前のファシズムの時代に郷土文化誌「高志人」を紙がなくなるまで出版し続けたことは称賛に値する。そして、時代的制約のなかで、「人は、人種を越えて、一人の人間として語られなければならない」と人権尊重を謳った。新しい戦争の時代に、私たちがどのようにレイシズムに向き合うか、翁は問うている。

2023年夏に『黒三ダムと朝鮮人労働者』を上梓した。敗戦から80年、戦後生まれの私を含めて多くの日本人は朝鮮植民地支配と侵略戦争の時代を体験していない。若い人は過去の戦争を知らない。「8月ジャーナリズム」を除けば、日本人が過去の戦争に向き合う機会は少ない。黒三ダム・発電所についても、黒四ダム同様、偉大な事業を成し遂げたという記憶があるのみで、従事していた朝鮮人労働者に関心をもつ人は多くない。

1930年代後半、中国侵略が泥沼化し、黒部川上流では不足する軍需物資の生産のために労働者の命の危険を顧みず突貫工事で電源開発が進められた。急峻な谷間にダムや発電所を造るために多くの犠牲者を出した。ホウ雪崩で86人が犠牲になった大事故の3日後には天皇の下賜金が出て、工事は続行された。隧道工事は岩盤温度160度という高熱地帯にぶつかったが、ダイナマイトの自然発火などを克服して完成した。戦争が激しさを増し、日本人が戦場に駆り出されたあとを担ったのは朝鮮人だった。差別され、虐げられたが、めげずに労働運動を行った。その中に金泰景という親方がいた。彼の消息を追って済州島まで調査に行ったが、わかったのは思いもかけない事実だった。あらためて、日本の植民地支配の影響の深刻さを考えた。

翁久允はアメリカで排日の現実にあい、その後広く世界を歩いて「コスモポリタン」という思想を生み出したが、日本が植民地をもつ立場に転じて、どう考えたのか知りたいと思っている。なぜなら、現在途上国から多くの若者が来日して様々な労働現場で技能実習生として働いている。過酷な労働条件で人権侵害がまかり通る職場もあり、制度そのものの欠陥も指摘されている。そして、今は日本人のだれもが外国人と日常的に接する時代だ。外国人と日本人が人種や立場を越えて対等に生きるにはどうしたらいいのか、いやでも考えなくてはならない。

別世界の存在だった文化人・翁久允が思いのほか身近に感じられてきた。